

概 要 報 告

| | |
|-------|-------------|
| 実施期日 | 令和7年8月5日(火) |
| 部 会 名 | 小学校 家庭部会 |

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『人間性豊かな たくましい子の育成を図る～生きる力を育む授業実践の工夫と展開～』

提案概要

本研究は、第6学年「生活を豊かにソーイング」の単元を2つの内容を関連付けた展開とした。

1つ目は、B「衣食住の生活」(5)生活を豊かにするための布を用いた制作、2つ目は、C「消費生活・環境」である。

“自分の課題を解決するために、自分が選んだ布を用いて制作する”というめあてのもと、主体的に取り組む手立てとして、以下の6つを実践した。

- ① 実際に袋に入りたい物を家から持参し、自分の課題に応じた袋を製作する。
- ② 新聞紙で試作品を作る。
- ③ 手芸用品店の方を学校に招き、家庭科室をお店にし、自分好みの布や紐を選ぶ。
- ④ 保護者にも内容を見てもらい必要な代金を用意し、購入に臨む。
- ⑤ 縫い方や紐・ポケットの取り付け方の動画をタブレット端末を活用し、児童各々のタイミングで確認できる。
- ⑥ 対話的な学びの手立てとして、ペア学習の導入。

[成果と課題]

自分の課題にあったものを製作することで、主体的に取り組むことができ、製作物への愛着や達成感を味わうことができ、手芸用品店の方との対話で自信を得ることもできた。タブレット端末を活用することで、個別最適な学びにつながり、授業者の負担軽減にもなった。余った布で2つ目の作品を作りだし、深い学びにつながった児童も見られた。

しかし、製作を行う際の人手不足や手芸用品店とのつながりを引き継ぐことの難しさ、他校で被服の製作に関してお困りの先生への情報提供や教材の周知の難しさなどの課題も見えてきた。

質疑応答

全体の場での質疑応答はなされなかったが、グループ協議の中で授業者に対し、以下のような質疑応答があった。

質疑：新聞紙からどのように袋作りにつなげていったのか。

応答：新聞紙袋に入りたい物を実際に置いて、折ってみて、どんな形にするか決めた。

全員が作れた。ここにかなりの時間(2時間くらい)がかかってしまったが、ここに時間をかけたことで、その後は、スムーズに製作できた。逆に、何cmと測っていたらできなかったと思う。

質疑：布の種類はどう選んだ。

応答：最初、お店の人はキャラクターものや幼い感じの布を選んでくれていたが、事前に相談し、大人っぽいものに変えてもらった。金額は、均一にしていた。

質疑：ミシンのとき、ボランティアさんはいましたか。

応答：一人でやりました。

協議の柱及び協議概要

協議の柱「心を動かす授業～深い学びにつながる体験・対話～」

キーワード

1. 教材・教具の工夫
2. 地域とのつながり
3. カリキュラム・マネジメントの工夫

協議グループは小学校教諭、中学校教諭も異校種合同の1グループ4～5人で構成された。

1. 教材・教具の工夫

- ・自由度が高いと教師が大変ではないか。
- ・キット教材を買うと、型紙をあてる経験もできず、みんな同じものなのでやる気につながりにくい。一方で、今回のように、自分が作りたい物が作れると、心に残り、やる気のもつながる。子どもの願いを大切にできている。
- ・製作の仕方を動画で撮影し配信するのがよいのか、教科書を見せるのがよいのか。実態として、どっちみち見ようとしないう子もいる。
- ・作ったバックを紹介する動画がよかった。PR動画を作るのもよいのではないか。

2. 地域とのつながり

- ・調理実習の時に買い物に行った。値段の安いものか高いもの、バック売りとはばら売り、どちらを選ぶのかなど、自己決定することや切実感と必要性が心を動かす。
- ・手芸用品店が学校に来てくれたのも大きい＝体験的な学習
子どもたちの表情も違う。心を動かす授業である。
- ・裁縫はサポートがないとまわらないが、事前の打ち合わせに時間をとられる。
→地域コーディネーターやコミュニティスクールを使っている学校もある。
- ・地域の方とつながりをもつことで、より深い知識が得られ、大人になっても記憶に残る。

3. カリキュラム・マネジメントの工夫

- ・授業時数は足りるのか。→総合的な学習の時間を使ってはどうか。
- ・調理実習も製作も、基本的な条件を同じにすれば、今回のように自由度の高い内容にしても、全員が主体的に取り組みつつ成果をあげることができるのではないか。
- ・中学校1年生が小学校1年生に、交通安全のお守りとして「無事カエル」マスコットを作ってプレゼントしている。

ワールドカフェ方式で協議がなされ、自由に意見交換をしながら、対話を深めていった。“担任をしながらこのような授業準備、展開ができるのだろうか”“教材・教具の準備に時間がかかり、作らせるだけで精一杯”“サポート体制をどうしたらよいか”など、課題も出てきた。

まとめ概要

手芸用品店の方を学校に呼び、実際に布を切る音を聞き、支払う経験をしたときの子どもたちの表情が素晴らしかった。教材との出会わせ方をひと工夫することで、子どもたちの気持ちは変わる。タブレット端末を利用したことで、自分のペースに合わせて進められる個別最適な授業実践だった。製作者の目線からの動画を作り、再生のスピードも自分で選べると、さらに効果的である。また、ペアを組んでの学習も効果的だった。ペアは、教師がねらいをもって編成するとよい。